

評 価 委 員 講 師

中 山 健 太 郎

近年胎児新生児の知覚や行動，母子相互作用についての研究が多い。それらの研究を通じ，方法論とその解釈の確立と，実際面への応用が問題になろう。拝聴して、いくつか興味のある演題があった。

サルと代理母の研究は方法論と比較行動学的解釈が確立されてほしい。

新生児の姿勢制御と胎児眼球運動に関する研究は，中枢神経系の発達との対比へ，いかに発展して行くか興味がある。

母乳分泌に及ぼす産科学的因子の検討は，Newton and Newton らの行ったような心理学的研究と組合せてやられてほしい。

母乳栄養の新生児行動に及ぼす影響，新生児の味覚，低出生体重の補充刺戟，極小未熟児の親子関係，未熟児の呼びかけ反応について研究は，新生児・未熟児のケアの改善にとり入れられて行ってほしい。

Brazelton の新生児行動評価法による日米の比較では，面白いいくつかの差異が見られたが，解釈，結論を急がない方が良かろう。

共働き育児の検討も，現下大切なことであるが，家庭のバック・グラウンドの考慮が必要であるし，非行の発生と短絡的に結びつけるべきではなかろう。

ほかに心理学的調査がいくつかあるが，方法論的にどれだけ普遍性を持ち，実際面に適用できるのか解らない。しかし，家族関係イントリなどは，更に発展してほしい分野である。

チック児の発達神経学的研究は，さきに行なわれた自閉児についての研究と統合され，体系づけられていくのであろうが，大成を期待したい。

多岐にわたる学際的分野の研究のまとめに当られる小林登班長の労を多としたい。